日中の歴史的関係を雅楽の側面から垣間見る

元神奈川大学講師、平安楽舎雅楽研究所所長　長谷川景光（会員）

雅楽は複合的芸能

皆さん。雅楽をお聴きになったことはありますでしょうか。雅楽で一番耳にする曲が、越殿楽（えてんらく）という曲なのですが、この曲は結婚式場の神殿で新郎新婦が三三九度の盃を交わす際に演奏されたり、CDで音楽がかけられたりする祝賀曲です。しかし、平成に入ってから中小の結婚式場では神殿が撤去され、これに替わってチャペルが付設されるように様変わりしていますので、越殿楽ですらお聴きになる機会は少なくなってしまいました。

一方、雅楽の曲名で一番有名なのが千秋楽なのですが、お聴きになったことがある方はまずいらっしゃいません。ご承知のとおり、相撲や歌舞伎、そして舞台の最終日を意味する言葉として遣われています。

さて、雅楽の特徴を一言で言い表すならば複合的芸能なのです。具体的には、前述の越殿楽、千秋楽といった唐楽を筆頭に、高麗楽（こまがく）、そして神楽歌、東遊びなどの国風歌（くにぶりのうた）の他、漢詩を詠う朗詠、和歌などを歌う催馬楽（さいばら）が代表的なジャンルです。因みに、私の専門は横笛なのですが、唐楽の時は龍笛を、高麗楽の時は高麗笛を、神楽歌の時は神楽笛を、東遊びの時は東遊び笛を、といったように各ジャンルで用いる楽器も異なります。

つまり、外来の芸能と国粋の芸能、儀礼の芸能と宴の芸能など、歴史も縁起もまったく異なる芸能をひとまとめにして雅楽と総称されています。

雅楽は一四五〇年以上の歴史

それでは、雅楽という概念はいつ、どこで形成されたのか、と尋ねられたら、当然、雅楽のルーツである中国であると、皆さんお考えになると思います。確かに、最古の出典として、紀元前5世紀以降に編纂された『論語』のなかで、「惡鄭聲之亂雅樂」という記載のあることが知られています。「雅」の文字が「正しい」の意で、すなわち「雅ノ楽」として使われていますので、雅楽とは異なる意味として遣われています。

では我が国ではというと、難読漢字として知られている平安

時代の「雅楽寮」は「うたまいのつかさ」と読みます。一方、『源氏物語』では「御遊び」、「管絃」、また単に「楽」と表現されており、当時、雅楽（ががく）という言葉が遣われていなかったことが分かります。

実は、雅楽（ががく）という言葉は、正式には明治時代に確立された概念であり、また雅楽という単独の音楽は存在しないのですが、日本の雅楽の歴史は一三〇〇年に及ぶなどとも言われます。これは大宝元年（七〇一）に制定された大宝律令により雅楽寮が設置されたことをもって雅楽の起源としているからなのです。

しかし、『日本書紀』における記載では、允恭四二年（四五三）に允恭天皇崩御の喪礼のため新羅から多数の楽人が遣わされたとの記載があり、また宣化一九年（五五四）に百済から四人の楽人が役目交替のため渡来したとの記載があります。前者は一過性の渡来楽人ですが、後者は常設的楽人として位置づけられ、少なくとも六世紀以前には渡来雅楽が定着していたことになりますので、このことから雅楽は一四五〇年以上の歴史があると位置づけられます。

日本の雅楽は中国の俗楽

さて、奈良時代の日本は、シルクロードの終着点であったことからさまざまな国の音楽が伝わりました。例えば、天竺（インド）の婆羅門僧正菩提遷那と林邑（ベトナム）の僧侶である仏哲が天平八年（七三六）に渡来し、八楽を伝えたことが知られていますが、その天竺楽、林邑楽の他、胡楽（蒙古、西域）、渤海楽（満洲）、度羅楽（アフガニスタンの都貨羅、タイの吐火羅、ビルマの墮羅、済州島の耽羅の四説あり）などが伝来しました。

私の最近の研究では、この他にウズベキスタン、インドネシアから伝わった曲もあります。つまり、雅楽とは古代に存在した、世界的にも歴史的にも例を見ないインターナショナル・ミュージックだったのです。

と、ここまで書くと雅楽は貴重で希有な存在であることがお分かりいただけたと思うのですが、意外な事実があるのです。それは、唐の国から伝わったのは雅楽、すなわち雅正の楽ではなく俗楽だったということなのです。

これについて、東京藝術大学の柘植元一名誉教授は、ビデオ『雅楽』の解説に次のように書かれています。

「わが国に伝えられている雅楽はもともと外来の楽舞であった。これは唐代の中国宮廷で行われていた宴饗楽（宴饗雅楽）が渡来したものである。この日本に伝えられた雅楽は確かに広義の雅楽ではあるが、実は本来の中国の狭義の雅楽ではない。というと、意外に思われる向きがあるかも知れない。その理由は、古代中国では雅楽が儒教の祭礼楽を意味したからである。中国では宗教儀礼のための雅楽と、宴饗のための讌楽（えんがく、燕楽、宴楽とも書かれる）とを区別していた。前者は正楽つまり雅正の楽として、後者は俗楽として分類されていた。俗楽は胡楽をも吸収していった。胡楽は中央アジア・西アジアなど西域の楽舞で、漢民族にとっては外来音楽であった。こうした起源を異にするさまざまな楽舞の様式が宴饗楽にとりこまれており、それが日本に中国の雅楽として伝えられたのである」

このように、多くの国から唐の都に伝えられた俗楽こそが日本の雅楽であったのですが、先ほど雅楽のルーツは中国であると前に記しました。中国から伝来した楽を唐楽と言い、別名は左楽、その舞を左舞と言います。これに対して右楽である高麗楽は朝鮮伝来の楽とされるのですが、韓国でも雅楽が伝承されており、韓国雅楽は唐楽と国楽に分類されます。

つまり、中国からダイレクトで伝わったか、朝鮮経由であったかの違いであって、雅楽の主体的ルーツは、やはり中国であ

ると言えるのです。

厄介な和魂漢才

さて、私が一番厄介と考える四文字熟語が和魂漢才です。以下に、『日本大百科全書（ニッポニカ）』（小学館発行）からの長い引用をご紹介します。

――日本思想上の用語。和魂漢才は平安中期に生まれた思想で、当時は「やまとだましい・からざえ」といった。中国渡来の正確鋭利な知識（漢才）もたいせつだが、日本社会の常識に通じ臨機の処置をとれる人柄（和魂）もまたたいせつというので、いわば専門と教養との兼有を説くもの。『源氏物語』に「猶（なほ）ざえをもととしてこそ、やまとだましゐの世にもちゐらるるかたもつよからめ」とみえるのはもっとも早いほうで、『大鏡（おおかがみ）』『今昔（こんじゃく）物語集』『愚管抄（ぐかんしょう）』などに同様の用例がある。鎌倉後期、蒙古（もうこ）襲来からおきる日本神国思想は、これに一変化を生じる。室町時代成立の『菅家遺誡（かんけゆいかい）』はその典型で、「一、凡（およそ）神国一世無窮之玄妙者……」「凡国学所要……和魂漢才……」とみえ、神国は至上で漢土の革命の国風と違う、日本の研究はかならず和魂漢才を兼具する必要があるという。この書は、平安前期の和漢兼修の大学者菅原道真（すがわらのみちざね）に仮託された偽書であるが、中世の人々が漢土に学ぶとともに日本の特性に注意し自覚をもつことを説いたのがよくわかる。「わこん・かんさい」という語はここで確立した――

なぜ厄介かと言うと、和魂は良しとして、漢才は「かんさい」「かんざい」「からざえ」「からざらえ」「からざい」などと読み方がさまざまあり困惑してしまうのが第一で、第二には引用文からもお分かりいただけるように、この熟語が日中の歴史的関係を如実に表すとともに、良い意味にも悪い意味にも捉えることができる言葉だからです。

雅楽全盛期であった平安時代において、雅楽は漢才の象徴的な存在であり、遣唐使によって唐の都より楽、舞が伝えられ、楽器、楽譜が持ち帰られました。考えてみれば、日本が狩猟採集の生活をおくっていた縄文時代に、中国では最古の編年体の書物である『春秋』が編纂されており、著しい文明格差が存在していたことは事実です。

中国でも宮廷音楽の研究が盛んに

では、本家本元である中国において雅楽、すなわち宮廷音楽はどのように継承されていったのでしょうか。その答えのヒントとなるのが、敦煌の莫高窟です。結論として引き合いに出したいのが敦煌琵琶譜なのですが、その前に、莫高窟が甘粛省敦煌市の近郊にある仏教遺跡であることは、皆さんご承知でい

敦煌莫高窟

らっしゃると思います。

莫高窟の仏像や壁画が見事であるだけでなく、壁を塞いで隠されていた敦煌文書が唐代以前の貴重な資料であり、その学術的価値の高さによって敦煌学という研究領域が生まれたほどでした。この、敦煌文書が壁を塞いで隠された経緯については、二つの説があります。一つは、敦煌が西夏により占領された際に経典を焚書されることを恐れて隠したという説。二つ目は、不必要なもの、いわば価値のないものをとりあえず置いておいたという説です。そして、現在、定説となっているのは二つ目のほうなのです。

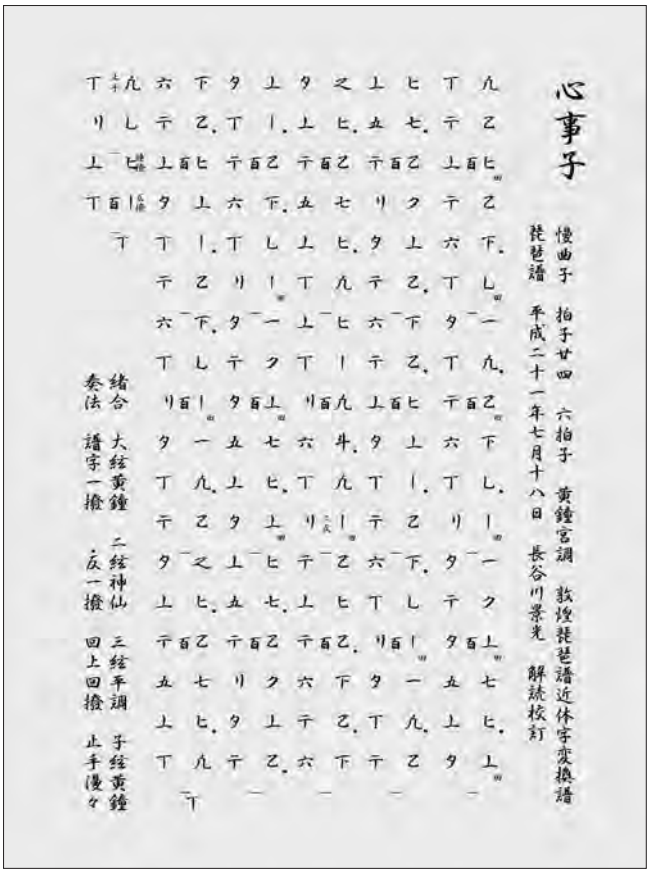
私の見解は両者の融合説です。つまり、西夏の軍団が迫り来るなかで、貴重な経典を含む書物、書類を隠すことを命じられた者は、取捨選択している時間的余裕などなく、壁の擬装に時間と心血を注いだ、という考えです。その結果、およそ八〇〇年もの間、誰の目にも触れることもなく、二〇世紀最大の文化遺産発見と言われるに至ったのだと。

そして、キーワードは焚書なのです。中国の歴史は、アンシャンレジームを完膚なきまでに駆逐することの繰り返しでしたので、唐代だけでなく古楽譜、古楽器の類はほとんど遺っていないのです。さらに、中国共産党の初期体制下では宮廷音楽の研究、復元など認めませんでしたが、一九八〇年代に敦煌琵琶譜ブームが沸き起こり各種の研究書が出版されるようになりました。

その研究の足がかりになったのは、日本の雅楽譜であり、正倉院に保管されている中国から渡ってきた楽器なのです。ですので、それらの研究書には、必ずと言ってよいほど源博雅著の『新撰楽譜』、藤原師長著の『三五要録』、『仁智要録』などとの比較研究がなされています。

さて、世界の文明は幾何級数的に高度化を加速しています。そして、二〇世紀に起こった事象の回数と影響力の乗数を悠に凌駕する事象が二一世紀に起こることは必然です。さらに、「歴史は繰り返す」ということも避けられないのではないでしょうか。

私のような偏向的分野に携わり微力な者ができることは、雅楽の演奏をすること、古楽譜の解読をすることぐらいなのですが、それが日中の文化交流、共同研究につながることにより、友好を深める一助になればと願うばかりです。



敦煌琵琶譜を筆者が解読した演奏譜

筆者略歴（はせがわ　かげみつ）

１９５３年生まれ。
元神奈川大学講師。
平安楽舎雅楽研究所所長。